



Title	備中南部における横穴式石室の展開 : 三須丘陵の古墳群を中心に
Author(s)	金田, 善敬
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 601-610
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105074
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

備中南部における横穴式石室の展開

—三須丘陵の古墳群を中心に—

金 田 善 敬

はじめに

岡山県に残存する横穴式石室を有する古墳の数は、正式な統計はないが、4000基を超える⁽¹⁾と推測されていて、多くは群をなして存在している。これらは群集墳と評価されていて、古墳時代後期の墓制を特徴づけるものである。しかし、数十から数百基で構成される群集墳の中で、測量や発掘により全容が明らかな古墳群の割合は低いのが現状である。そのため、群集墳における横穴式石室の位置づけや評価に関する議論は十分に深まっているとはいえない。本論では、このような問題を認識しつつも、近年、調査事例が増加し、しかも著名な横穴式石室が存在する備中南部の三須丘陵の事例に注目し、その特徴について論じることを目的とする。

1. 岡山県の横穴式石室に関する研究史

岡山県における横穴式石室の研究は、県内における群集墳の分布調査や発掘調査により進展した。近藤義郎は津山盆地の後期古墳の調査を通じ、群集墳の盛行は、それ以前の共同体の分解による家父長制階級関係の広範な成立と発展を契機としたものと考えた（近藤 1952）。これに対し、西嶋定生は、後期古墳の増加の背後には大和政権の身分秩序であるカバネ制度の拡大が想定されるとした（西嶋 1961）。また、群集墳内における階層性については、今井堯・近藤義郎が墳丘や横穴式石室の規模、馬具や武具などの副葬品の内容からそれを示唆し（今井・近藤 1970）、新納泉は主に武器の組成から群集墳の階層性について言及している（新納 1983）。他方、横穴式石室の階層構造については、主に横穴式石室の規模から言及されてきた（宇垣 1995、亀山 1999）が、その後、笹栗拓が、本論で対象とする備中南部の横穴式石室の分析から、少なくとも超大型・大型・中小規模の横穴式石室による階層構造を論じている（笹栗 2010）。近年では、尾上元規や大久保徹也も備中南部の横穴式石室の地域性や展開について論じている（尾上 2020・2023、大久保 2023）。

このように、岡山県内の各地域において、群集墳や横穴式石室の分析から古墳時代の社会構造や地域性の究明が試みられてきたが、先述のとおり、群集墳全体の実態を解明したような調

査事例自体が少ないため、総じて資料不足の感が否めない。このような状況の中で、全国的にも著名なこうもり塚古墳や江崎古墳、緑山古墳群といった横穴式石室墳が分布する備中南部の三須丘陵では、これまでも盛んに古墳の調査が進められてきたが、近年、岡山県教育委員会や岡山大学による調査が実施され、同丘陵の横穴式石室の概要が明らかになってきている。本論では、この三須丘陵における横穴式石室を中心に分析を行い、当地域における横穴式石室の展開とその特徴について触れたい。

2. 三須丘陵における横穴式石室の変遷

三須丘陵は総社市東部から岡山市西部にかけて存在する標高 100 m 以下の低丘陵である(図 1)。この丘陵では過去の分布調査で 164 基ほどの横穴式石室が報告されている(近藤編 1987)が、1976 年に刊行された岡山大学考古学研究部による分布調査では、この丘陵に所在する 52 基の横穴式石室の略測図とその概要が報告されている(岡山大学考古学研究部 1976)。

一方、発掘調査については、岡山大学考古学研究室や総社市教育委員会及び岡山県教育委員

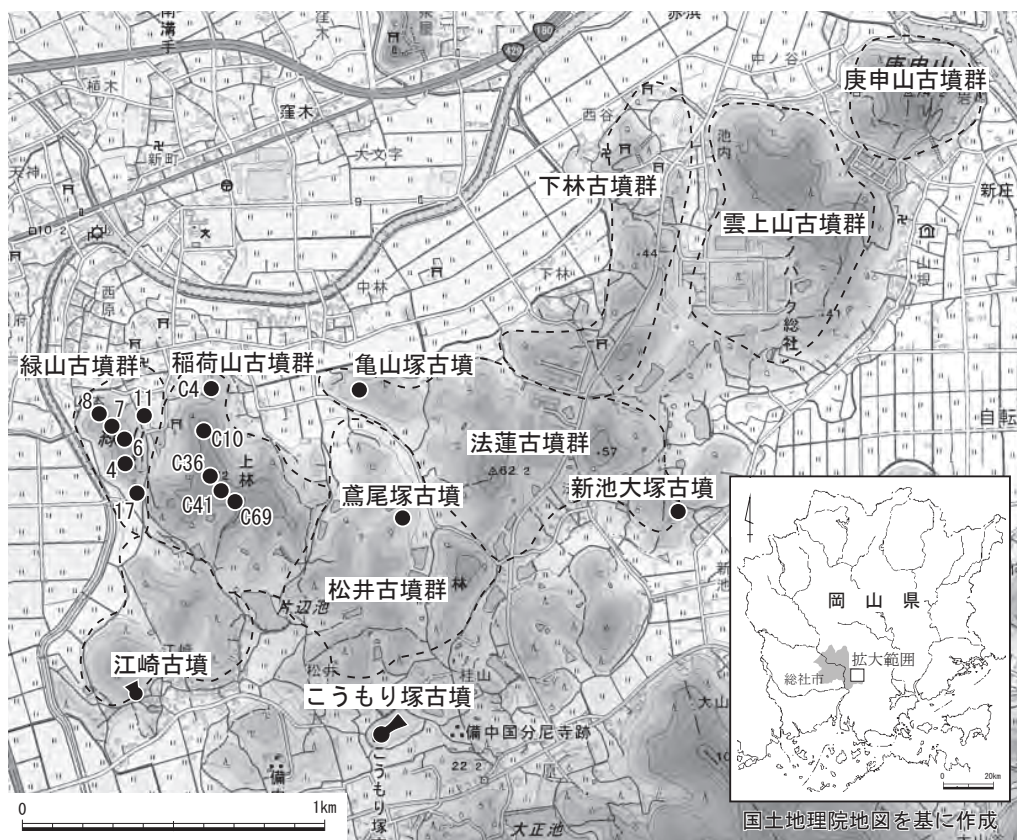


図 1 三須丘陵における主な横穴式石室の分布 (1/25,000)

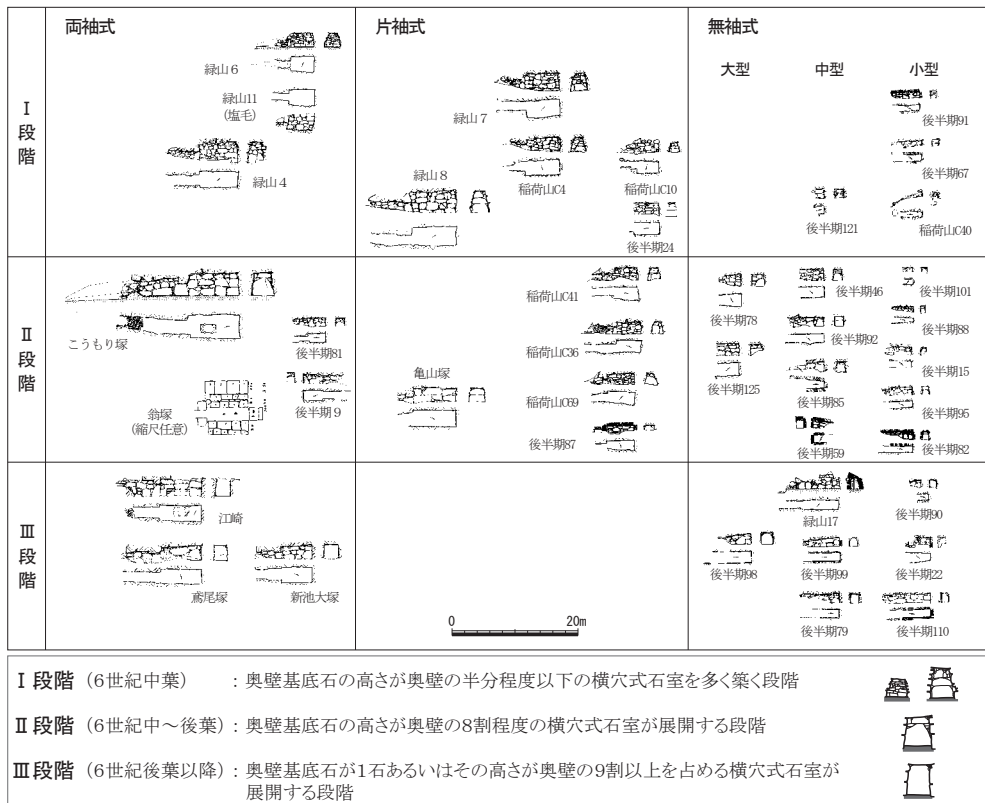


図2 三須丘陵における横穴式石室の変遷（1/1, 200）

会により、こうもり塚古墳、江崎古墳、高尾塚古墳、緑山古墳群などの調査が実施されている。また、近年、岡山県教育委員会により緑山・稲荷山古墳群の測量調査が実施され、再調査を含む横穴式石室9基の実測図が公開された。これらの成果は同委員会が刊行した報告書（岡山県教育委員会 2023）に収載されているが、同報告書では従前の成果を踏まえた三須丘陵における横穴式石室の変遷図も提示されている。本論ではこの変遷図を基に、その後の所見を踏まえ、一部改変したものを使用する（図2⁽²⁾）。

なお、同報告書では、横穴式石室を奥壁の基底石が奥壁の高さに占める割合を基に分類し、これが、横穴式石室の新旧を反映している可能性が高いと考えて段階（Ⅰ～Ⅲ段階）を設定している。この地域で、奥壁基底石が大型化していく傾向は広く認められており（新納1987）、本論もこれに従って議論を進める。

3. 横穴式石室の分類

それでは、古墳時代後期に三須丘陵でどのような形態の横穴式石室が築造されていたのであ

ろうか。ここでは、横穴式石室の平面形を基に分類を行う⁽³⁾⁽⁴⁾。

(1) 両袖式横穴式石室の分類

三須丘陵における両袖式石室の大きさ及び平面形を検討した(図3)。これによると、三須丘陵の両袖式石室は平面形の類似から大きく次の5種類に分類できる。

両袖1類：こうもり塚古墳で、玄室長約8m、奥壁幅約3.6mを測る。玄室長指数(玄室長／玄室幅：玄室幅を1とした時の玄室長の割合)は2.2程度である。

両袖2類：緑山4号墳、江崎古墳、鳶尾塚古墳が該当し、玄室長6～7m、奥壁幅2.2～2.6m程度、玄室長指数は2.6～2.7程度のもの。

両袖3類：新池大塚古墳などが該当し、玄室長4.8m、奥壁幅2.3m程度で、玄室長指数2.0程度のもの。

両袖4類：緑山6号墳と緑山11号墳(塩毛古墳)が該当し、玄室長3.6～4m、奥壁幅2～2.5m程度で、玄室長指数が1.6程度のもの。

両袖5類：後半期9号墳や後半期81号墳が該当し、玄室長2.5～3m、奥壁幅1～1.5m程度を測る小型のものである。ただし、両古墳とも自身の踏査で確認できておらず、詳細

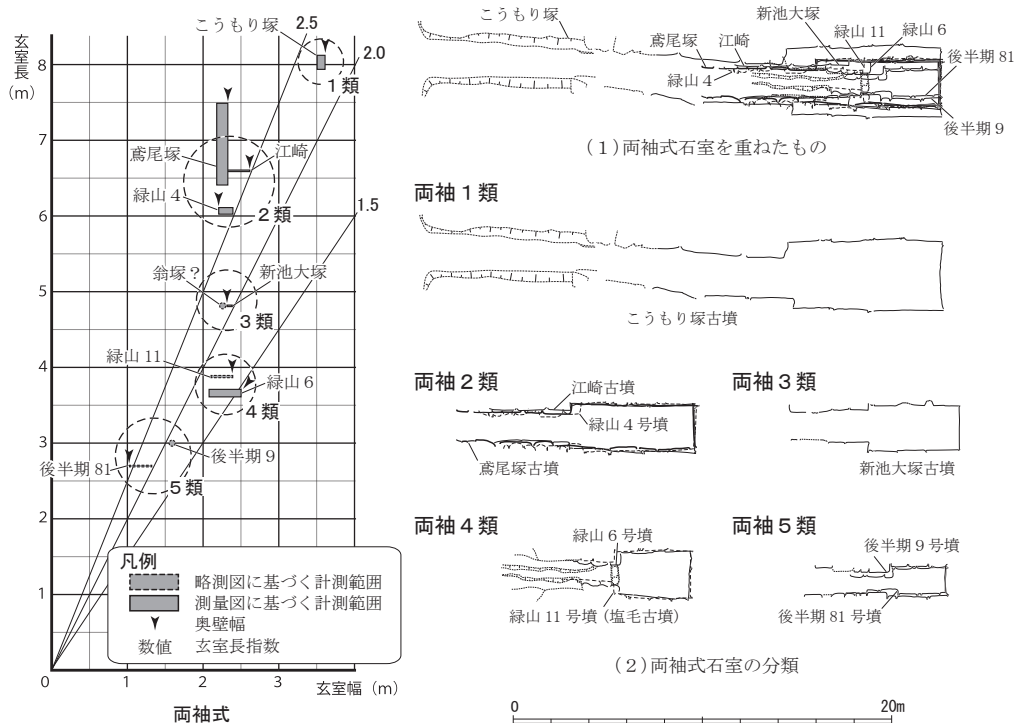


図3 両袖式横穴式石室の分類

も不明であることから、本論では検討対象外とし、その評価は将来に委ねたい。

以上、三須丘陵には5種類の両袖式石室が存在していたことが分かる。これらは、平面形や玄室長指数において相違する点が多いことから、築造において互いに異なった平面規格を基に構築されていた可能性が高い。

（2）片袖式横穴式石室の分類

同様に、片袖式石室の大きさ及び平面形を検討した（図4）。これをみると、三須丘陵の片袖式石室はその平面形の類似から大きく次の3種類に分類できる。

片袖1類：緑山8号墳などが該当し、玄室長7m、奥壁幅2.5～3m程度で、玄室長指数は2.5程度である。亀山塚古墳は現状では詳細が確認できないが、この類型に属する可能性がある。

片袖2類：緑山7号墳、稲荷山C4号墳が該当し、玄室長5.2～5.7m、奥壁幅2.5m程度で、玄室長指数は2.0～2.5程度のもの。

片袖3類：稲荷山C10号墳、稲荷山C36号墳、稲荷山C41号墳などが該当し、玄室長3.5～4.5m、奥壁幅1.5～2m程度で、玄室長指数が2.0～2.5程度のもの。

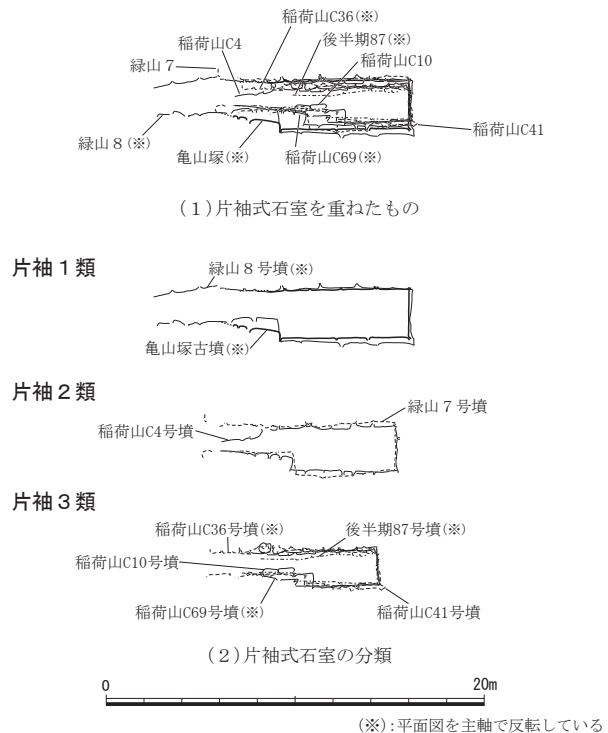
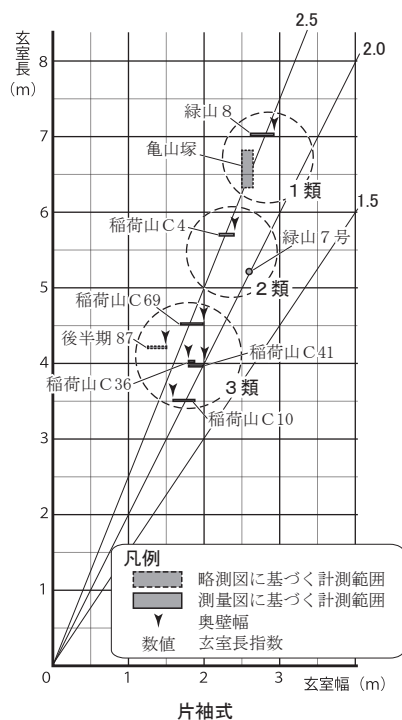


図4 片袖式横穴式石室の分類

以上の分類から、三須丘陵には3種類の片袖式石室が存在していたことが分かった。全体として玄室長指数が2.0～2.5のものが多く、両袖式石室と異なり、平面規格の共通性（相似性）が認められるものがある。また、1～3類はそれぞれ大型・中型・小型に対応でき、片袖式石室は大きさによる階層構造を内包していた可能性が指摘できる。

（3）無袖式横穴式石室の分類

無袖式石室は全体像が明らかなものが少ないため、平面形による分類は困難である。これについて、同報告書では奥壁の幅を基に幅約1.2～1.6mを中型とし、それより幅が狭いものを小型、広いものを大型と分類している。図2に示したとおり、無袖式石室は大型から小型まで認められることから、大きさによる階層秩序があった可能性が高い。

4. 三須丘陵における横穴式石室の展開

これまでの分析から、三須丘陵における横穴式石室の特徴を段階ごとにまとめる。

I 段階

主に両袖式と片袖式石室が出現する。両袖式石室では2・4類が出現する。2類の緑山4号墳は畿内型石室に分類でき、4類の緑山6号墳は袖部の立柱や玄室の腰石及び廻石の存在から九州方面の影響をうかがわせる。片袖式石室はいずれも畿内型石室の範疇で理解できる。片袖式1～3類すべてがこの段階から出現しており、当初から階層性を示している。

II 段階

両袖式石室として、1類のこうもり塚古墳の出現が特筆できる。前段階にない規模で、他の横穴式石室を凌駕する。片袖式石室は1類と3類が存在し、前段階の階層構造を継承していると考えられる。1類の亀山塚古墳の情報は少ないが、I段階の緑山8号墳とほぼ同規模であることから、前段階の地位を踏襲している可能性がある。3類の片袖式石室は規模や平面形が互いに類似していることから、平面規格を共有していた可能性が高い。無袖式石室はこの段階から増加傾向を示す。大型から小型まで出現しており階層性が認められる。

III 段階

両袖式石室としては2類（江崎古墳、鳶尾塚古墳）と3類（新池大塚古墳）がある。2類はI段階の緑山4号墳で確認できるが、II段階ではこれに相当するものが見出せないため、その継続性は不明である。3類はこの段階ではじめて出現する類型である。片袖式石室は確認できないかわりに、無袖式石室が三須丘陵に多数出現する。無袖式石室は前段階同様に大型から小型まで存在し階層性を顕示している。

5. 三須丘陵における横穴式石室の意義

以上の分析から、横穴式石室はその平面形の違いにより異なった展開をしていることが分かる。ここでは、それぞれの横穴式石室について、その特徴を述べる。

両袖式石室

1～5類の多様な類型が存在するが、どの段階においても横穴式石室全体に占める割合は低い。Ⅰ段階の2類（緑山4号墳）は畿内、4類（緑山6号墳）は九州方面からの影響が考えられる。Ⅱ段階の1類（こうもり塚古墳）は他と比べ規模が超越しており、特異な出現契機を想定する必要がある。Ⅲ段階の2類（江崎古墳、鳶尾塚古墳）と3類（新池大塚古墳）は形態に相違があり、それぞれ別の系譜を考える必要がある。九州系の4類を除くと、両袖式石室は単独で立地する傾向が強いうえ、規模も大きく、地域で盟主的な地位を占めていたと想定できる。しかし、類型どうして規格共有の度合が少なく、片袖・無袖式石室にみられる階層性は明確には見出せない。

この両袖式石室導入の背景のひとつとして、脇坂光彦は被葬者が畿内政権中枢と関わっていた可能性を指摘する（脇坂2018：p.62）。このように考えると、この地域の両袖式石室は、被葬者の地域構成員に対する相対的な地位の表示というよりも、むしろ、近畿地方等との交流を通して獲得した対外的な地位を、域内外に向けて誇示することが目的であったと推測できる。

この点について、三須丘陵に所在する両袖式石室と平面形あるいは構造が類似した横穴式石室が他地域で認められることは、被葬者の生前の交流関係を推測するうえで重要である。例えば、こうもり塚古墳の横穴式石室については、壁面構造に違いがあるものの、奥壁に奈良県五条野丸山古墳との類似を指摘する意見がある（新納2009：p.78）。同じく、こうもり塚古墳は、倉敷市箭田大塚古墳と全体的な石組みや配石が似ているといわれている（脇坂2003：p.201）。さらに、江崎古墳は広島県二子塚古墳後円部石室と規模の相似が指摘されている（脇坂2018：p.62）。そのほか、新池大塚古墳も平面形において岡山市牟佐大塚古墳と類似していることが指摘されている（寒川ほか2014：pp.110-111）。このように、三須丘陵における両袖式石室と類似した横穴式石室が他地域に存在することは、当地域における両袖式石室の築造契機を推察するうえで欠かせない。

片袖式石室

1～3類がⅠ・Ⅱ段階にみられ、三須丘陵で群をなして築造されていたことがうかがえる。玄室長指数は2.0から2.5のものが多く、平面規格を共有して築造された横穴式石室であった可能性が推測される。また、大型・中型・小型と区分でき階層構造も明確である。これらの片袖式石室は畿内型石室に分類することが可能で、この地域に広範に普及している。土生田純之

は畿内型石室の特徴として在地の墓制を一変するような強力な浸透力をあげている（土生田 1994 : p. 143）が、この地域においては、まさしく、この片袖式石室こそがそのような役割を最初に担ったことが分かる。片袖式石室は当該地域を表象する横穴式石室として明確な意識の中で地域構成員に共有されていたと推定できる。

無袖式石室

主にⅡ・Ⅲ段階に認められ、片袖式石室以上に群をなして広範に展開している可能性がある。階層性を示しており、Ⅱ段階まで片袖式石室が担った地域構成員の表象としての横穴式石室の役割を踏襲したと考えられる。

6. 古墳時代後期における横穴式石室の展開

以上の検討から、三須丘陵の横穴式石室は、平面形の相違によりその築造背景が異なっていた可能性があることが推測できた（図5）。

両袖式石室はⅠ段階から出現するが、在地での展開はむしろ限定的であった。これは、両袖式石室が地域構成員を対象とした墓制ではなく、近畿地方を含む広範な地域との交流関係を通じて獲得した被葬者の政治的地位等を体現するための墓制であったためと考えられる。

他方、両袖式石室とは異なり、地域で広く普及し、地域の集団関係を具現化し、地域の表象としての役割を果たしたのはむしろ片袖式及び無袖式石室であったといえる。無論、片袖式や無袖式石室の被葬者も対外的な関係を有していたことに間違いはないが、それはむしろ金銅装の馬具や武器などといった威信財の獲得により付加された属性とみるべきであろう。

このように、横穴式石室を含む群集墳の研究において、横穴式石室の形態の違いに着目し、

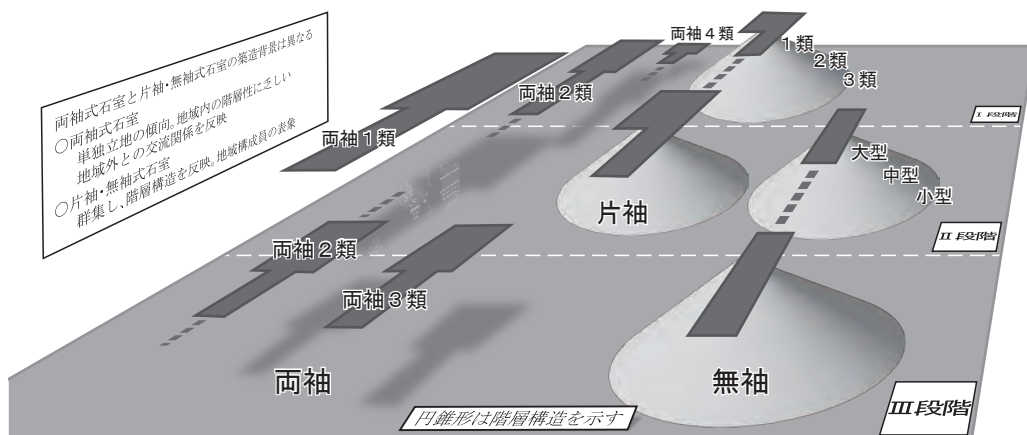


図5 三須丘陵における横穴式石室の展開

その築造背景を検討することは重要である。今回は、備中南部の三須丘陵という限られた地域をモデルに検討したが、今後、資料が増加していく中で、これ以外の地域でもその特性が明らかになっていくことを期待したい。

謝 辞

本論を作成するにあたり、岡山県古代吉備文化財センター、岡山大学考古学研究室のみなさまには大変お世話になりました。それ以外にも考古学関係者など数多くの方々から有益な御教示を賜りました。遺漏を恐れ、ここにお名前は割愛いたしますが、深く感謝申し上げます。

註

- (1) 岡山県遺跡地図を基に概数を算出した（岡山県教育委員会 2003）。
- (2) 図 2 は、『史跡 こうもり塚古墳』の第 132 図（岡山県教育委員会 2023 : pp. 189-190）を一部改変している。主な改変箇所は次のとおりである。1）同報告書では後半期 120 号墳と緑山 17 号墳を、該当する報告書（岡山大学考古学研究部 1976、総社市教育委員会 1984）の記述に従い片袖式石室に分類するが、著者は無袖式石室の可能性が高いと考える。2）鳶尾塚古墳も片袖式石室に分類するが、調査の進展により両袖式石室の可能性が高くなったので、同古墳の報告書（清家・四田編 2019）の記述に従い両袖式石室とする。なお、鳶尾塚古墳の横穴式石室の袖の位置は左右で異なっているが、左側が本来の玄室の規格を反映していると考ええる。なお、図 2 で使用した横穴式石室の図面の出典等については、同報告書を参照いただきたい。
- (3) 本論では横穴式石室の袖や壁の方向については、羨道入口から奥壁を見た時の左右としている。
- (4) 本論では横穴式石室の平面形に着目する。太田宏明は、横穴式石室築造において同一型式を生み出す規範となった情報「範型」が現れる属性として、①意匠的属性、②技術的属性、③規格、④儀礼をあげる（太田 2016 : p. 145）が、本論でいう「平面形」とは①③に属する要素である。②④も当地域の横穴式石室の意義を考えるうえで重要であるが、本論ではこれに関する議論は割愛する。

引用・参考文献

- 今井 堯・近藤義郎 1970 「群集墳の盛行」『古代の日本 第4巻 中国・四国』角川書店、東京：pp. 193-211
- 宇垣匡雅 1995 『戸古墳群発掘調査報告書』岡山県大原町教育委員会、岡山
- 大久保徹也 2023 「大形石室墳にみる地域的結集とその性格—三須古墳群・大野原古墳群・綾北古墳群の検討から—」『古代出雲と吉備の交流』島根県古代文化センター研究論集第 30 集 島根県教育委員会、島根：pp. 201-220
- 太田宏明 2016 『横穴式石室と古墳時代社会—遺構分析の方法と実践—』雄山閣、東京

- 岡山県教育委員会 2003『改訂 岡山県遺跡地図』第1～9分冊、岡山
- 岡山県教育委員会 2023『史跡 こうもり塚古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 266、岡山
- 岡山大学考古学研究部 1976『三須丘陵遺跡分布調査報告』、岡山
- 尾上元規 2020「吉備における横穴式石室の展開と地域性」『横穴式石室の研究』同成社、東京：pp. 53-65
- 尾上元規 2023「吉備における6、7世紀の画期」『古代出雲と吉備の交流』島根県古代文化センター研究論集第30集 島根県教育委員会、島根：pp. 173-192
- 亀山行雄 1999「岡山県内の横穴式石室」『論争 吉備』考古学研究会、岡山：pp. 3-18
- 寒川史也・佐々木新吾・三浦由美子 2014「新池大塚古墳の測量調査」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第6号 岡山市教育委員会、岡山：pp. 102-119
- 近藤義郎 1952「佐良山古墳群」『佐良山古墳群の研究』津山市、岡山：pp. 9-53
- 近藤義郎（編）1987『岡山県総社市緑山古墳群』総社市文化振興財団、岡山
- 笹栗 拓 2010「横穴式石室の展開過程と地域社会の構造—吉備の分析を中心に—」『古代学研究』第188号 古代学研究会、大阪：pp. 39-58
- 清家 章・四田寛人（編）2019『鳶尾塚古墳Ⅰ—墳丘測量調査・石室実測調査報告—』岡山大学大学院社会文化科学研究科考古学研究室、岡山
- 総社市教育委員会 1984『緑山17号墳・すりばち池3号墳・山津田遺跡・清水角遺跡』総社市埋蔵文化財発掘調査報告1、岡山
- 新納 泉 1983「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号、岡山：pp. 50-70
- 新納 泉 1987「緑山古墳群の築造年代と形成の過程」『岡山県総社市緑山古墳群』総社市文化振興財団、岡山：pp. 81-86
- 新納 泉 2009「前方後円墳廃絶期の暦年代」『考古学研究』第56巻第3号、岡山：pp. 71-91
- 西嶋定生 1961「古墳と大和政権」『岡山史学』第10号 岡山史学会、岡山：pp. 154-207
- 土生田純之 1994「畿内型石室の成立と伝播」『古代王権と交流5 ヤマト王権と交流の諸相』名著出版、東京：pp. 141-171
- 脇坂光彦 2003「吉備地方の大型横穴式石室の評価」『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズⅧ 同志社大学考古学シリーズ刊行会、京都：pp. 193-206
- 脇坂光彦 2018「史跡・二子塚古墳造営の歴史的意義・背景について」『芸備』第50集 芸備友の会、広島：pp. 61-70